

和歌

紅葉會詠艸

○ 子守唄遠く聞わてとゞろきの鐘に暮れゆく宇土の里かな
 城跡の芝生のうちにつくぐと物を思へば鳩來りなく
 夕ぐるゝ磯の浦和の岩の上にかへる舟子の唄をきくかな
 敵を逐うて小山を行けば岩が根に黄菊白菊一むら咲けり
 旅人の姿は見ねで鈴の音のかすみにひゞく關のあけぼの

梨雨

○ 何となく古き日記の興ありてくりかへし見る秋の長夜を
 何となく昔の友の戀しくて文やらむかと思ふわれかな
 我もまた戀にさちあく泣く人の憂ひをしりぬはたちの秋を
 水底の砂も清らに影見ねて野菊うなづくさと川の岸
 すさまぞく落葉さそひし風なぎて月てりわたる鎮守のほとり
 雨の日に文して友のいひけらく歌に今宵を明さむいかに

○ 手折らむと我は來ぬをぞ萩の露とらば消ぬべしまた折りに來む
 ひたすらにやさしき人となれもひしを偲ぶ心のいつきざしけむ

ゆづる

藤輪

錨山人

○ 山ゐして秋は淋しきわが宿の檣の木立に霧たちのぼる
 里の子が利鎌どりもち晩稻刈る小田の畷に時雨ふるなり
 七歳の戀の歌ほご火にねきて焰のかけには、笑む夕べ
 ふるさとの杜蔭もけば古への夢さそひ來る入相の鐘
 唐崎の松の木かけゆ見渡せば鐘に暮れゆくにはほの海原
 霧のなかにわが家いつとて學び子が里の小橋に何れもふらむ
 峠越わて君がり行けば裏山の椎の木立に霧たちなびく
 霧こむる浪路はるけをよる明けて月うすらぐよマストの上に
 あら磯のぬれたる巖にひとりたちて物思ひ居れば月かたぶきぬ
 夜ふけて歌ねもひ居ればわが宿の椎の木立にうち時雨する
 七歳の戀は仇なり今宵はも歌ほご焼きて神まつらうよ

槇雨生

○ つるぎいさ銃さる旅のうち、くるまも、うなりいでつるもの、いさ
 澤なきと、さて、さりいで、人に見せんとすれば、うたいでいと少くて。

花岡の頂うすく霧こめてヒローットの文字ねぼるげに見ゆ
 いてふ葉を二つつみとりかたみにど歌集のうちにはさみれくかな
 岩間よりしみづ落るところ坐をしめて飯くひをれば木の葉ちりかゝる

色赤き小草つみねぬ送りやりて心あかすべき人もあらなくに
たづね来て昔をしのぶ我袖に木の葉ちりがくる八代の宮
菊を賣る乙女顔よし聲もよし心よからむ此花のごと
昨日しも軍ならしく松山のふもとにうすく霧こめてあり

春浦生

土手の木に馬つなぎれきて賤の子が唐芋洗ふ里の夕ぐれ
夕陽照る峯のいたゞき茜さして谷風さむく紅葉みだるゝ

○近詠二二三

そまを

國分寺のあとなりと傳ふ破寺の仁王にあたる木枯の風
大阿蘇の裾野が原に秋ふけて野馬いなゝくたゞ君を見ず
阿蘇山の尾にたつ姿ぶり打ちなびき北に向へば雨ふるといふ

失戀といふ題にて

人孀にかれはあるものをいつまでか歌にこの身は老いんとすらん
焼き捨てしわが歌反古の大かたはつれなき人を戀ひ恨む歌
ともすれば戀となるかも拆にふれてたゞ心なくすしいづる歌

漢詩

梅花石歌